ISSN 0027-9153

月報

国立国会図書館

特集 子どもと本をつなぐ ―国際子ども図書館の取り組み―
那須正幹さんに聞く ―ズッコケ三人組からのメッセージ―

2014.5
No.638

国立国会図書館利用案内

東京本館

所　在　地　〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号　03(3581)2331
利用案内　03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間　月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は 17:00までです。
資料請求受付★　月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。
即日複写受付　月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
後日郵送複写受付★　月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　利用者サービス部　サービス運営課　03(3581)2331　内線25211

関西館

所　在　地　〒619-0287　京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号　0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、
科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間　月～土曜日 10:00～18:00
資料請求受付★　月～土曜日 10:00～17:15
セルフ複写受付　月～土曜日 10:00～17:30
即日複写受付　月～土曜日 10:00～17:00
後日郵送複写受付★　月～土曜日 10:00～17:45
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　関西館　総務課　0774(98)1224［直通］

国際子ども図書館

所　在　地　〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電話番号　03(3827)2053
利用案内　03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ　http://www.kodomo.go.jp/
利用できる人　どなたでも利用できます。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料　国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間　火～日曜日 9:30～17:00　※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。
第一・第二資料室の利用時間　閲覧時間　火～土曜日 9:30～17:00
資料請求受付　火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間　即日複写受付　火～日曜日 10:00～16:00
後日郵送複写受付　火～日曜日 10:00～16:30
複写製品引渡し　火～日曜日 10:30～12:00　13:00～16:30

■見学のお申込み／国立国会図書館　国際子ども図書館　03(3827)2053［代表］

5 May

CONTENTS

02 子どものための百科図譜　19世紀ドイツの森羅万象
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

04 特集　子どもと本をつなぐ―国際子ども図書館の取り組み―

06 那須正幹さんに聞く―ズッコケ三人組からのメッセージ―

16 IFLA児童・ヤングアダルト図書館分科会「絵本で世界を知ろうプロジェクト」と国際子ども図書館展示会「絵本で知る世界の国々」

20 国際子ども図書館・夏のイベントの事例紹介
夏休み読書キャンペーン

22 発掘！埋蔵文化財調査から見えた歴史
－国際子ども図書館新たな幕開けへ向けて－

28 国立国会図書館の平成26年度予算

30 館内スコープ
中高生に国際子ども図書館の案内をしています

31 本屋にない本
○『読書推進運動協議会の50年　1959-2009』
○『生誕百年 新美南吉』

33 NDL NEWS
○法規の制定

35 お知らせ
○国際子ども図書館講演会「子どもの探究活動と図書館の可能性」
○新刊案内　国立国会図書館の編集・刊行物

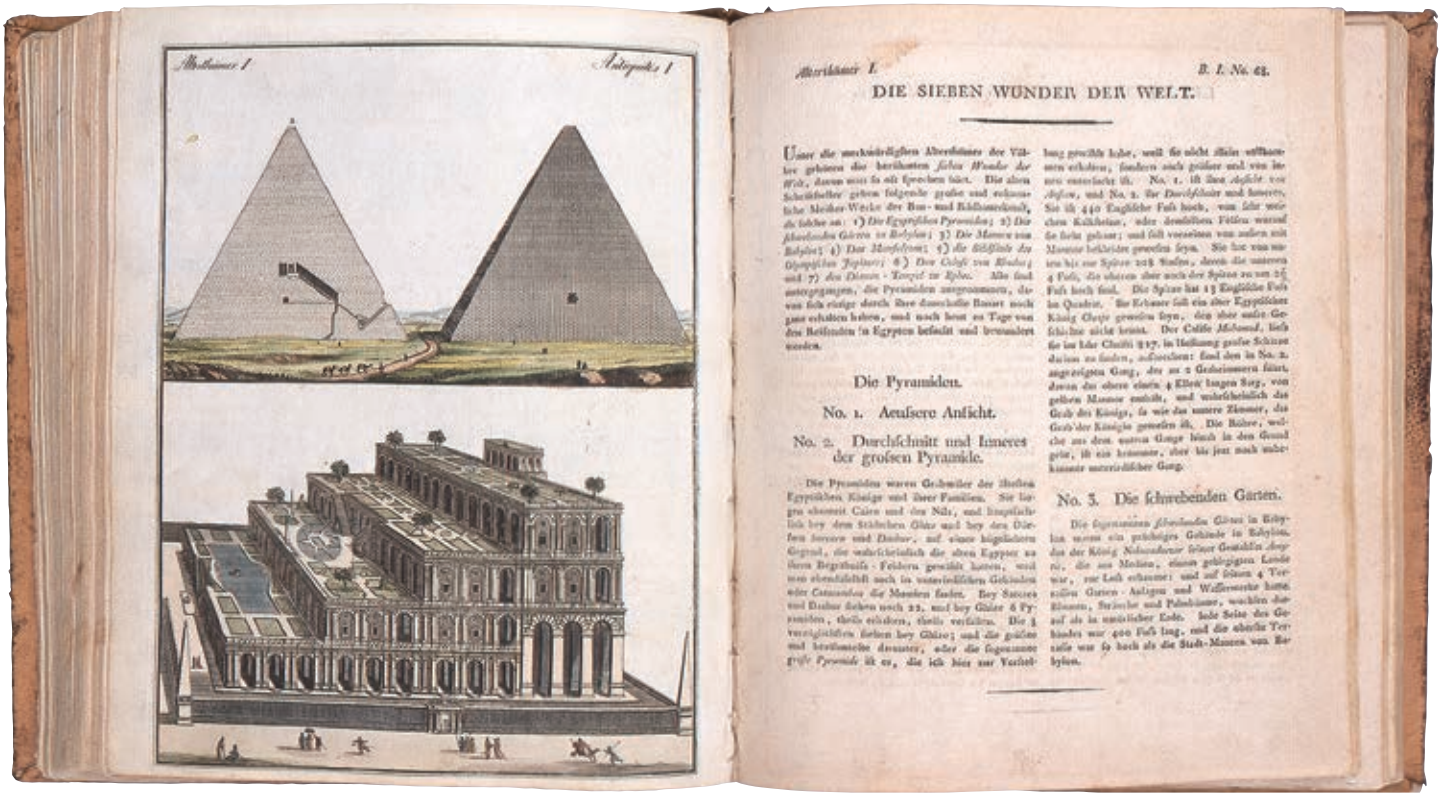
今月の一冊 May

国立国会図書館の蔵書から

子どものための百科図譜　19世紀ドイツの森羅万象

檜山　未帆

写真 1



Bilderbuch für Kinder :

enthaltend eine angenehme Sammlung von Thieren, Pflanzen, Blumen, Früchten, Mineralien, Trachten, und allerhand andern unterrichtenden Gegenständen aus dem Reiche der Natur, der Künste und Wissenschaften : alle nach den besten Originalen gewählt, gestochen, und mit einer kurzen wissenschaftlichen, und den Verstandes-Kräften eines Kindes angemessenen Erklärung begleitet / von F.J. Bertuch.

Weimar : Verlag des Industrie-Comptoirs, 1792-1830.

<請求記号　Y11-A1215>

ドイツ・ワイマール出身の作家で出版業者のF. J. ベルトゥーフ（Friedrich Justin Bertuch 1747-1822）が出版した、世界初の子ども向けの百科図譜がこの*Bilderbuch für Kinder*（『子どものための絵本』全12巻、1790-1830）である。日本では『少年絵本』というタイトルでご存じの方もいらっしゃるかもしれない。

啓蒙主義のドイツにあって、コメニウスの『世界図絵』に倣って19世紀科学のすべてを網羅しようとした子ども向けの百科図譜で、手彩色銅版画1000葉以上が収録され、その解説がドイツ語とフランス語の2か国語、またはドイツ語・フランス語・英語・イタリア語の4か国語で記されている。1658年に出版された『世界図絵』は、世界の成り立ちを絵と、子どもでも読める簡単な文章で解説した一種の教科書である。その内容は「世界」や「神」から始まり、非常に体系だって説明されている。一方、*Bilderbuch für Kinder*には『世界図絵』のような統一的世界観はなく、あらゆる分野の事柄がバラバラの順番に並んでおり、各巻ごとに巻末に索引が付されている。第1巻の序文によると、「子どもたちが読んでいて飽きないように」という配慮があったようである。

その内容は、『子どものための絵本：動物、植物、草花、果実、鉱物、衣装その他各種の学ぶべきものを、自然、芸術、学問の領域から集めた楽しい本』という長い正式タイトルのとおり、この世の過去から現在までの森羅万象に及んでおり、中には世界の七不思議（写真1）や伝説上の生物（写真2）までもが紹介されている。伝説上の生物ではフェニックスや一角獣、ドラゴンなどが緻密な絵で表現されており、さぞかし子どもの想像力をかきた

1 Frederic William Herschel（1738-1822）イギリスの天文学者。ドイツのハノーヴァー生れで1757年に渡英。1770年ころから天文学に興味をもち、天文書を読むだけではあきたらず、やがて反射望遠鏡を自作するまでになった。天王星をはじめ数多くの星、星雲・星団を発見。1816年ナイトに叙せられる。

上から
写真2、
写真3、
写真4

右図
写真5

てるものだっただろうと思われる。

1789年に作られたハーシェル[1]の40フィート望遠鏡が1798年出版の第3巻に掲載されていたり（写真3）、1818年にラッフルズとアーノルド によって発見されヨーロッパに紹介されたラフレシア[2]が、1824年に出版された第11巻に早くも紹介されていたり（写真4）、当時の最新技術や情報を積極的に取り入れている様子がうかがえる。

イギリスやアメリカ、中国やインドなど、他国の文物についても多岐に渡って紹介しているこの百科図譜だが、日本については第8巻に記述がある。

「JAPANISCHE TRACHTEN（日本の服飾）」と題されたこのページ（写真5）では、江戸時代の日本人と思われる人々が紹介されている。上の図は、左から順に鯨肉売り、役人の男性、中央の女性2人には、貧しい家の子どもたちの負ぶわれ方が見て取れる、という記述がある。いちばん右はもみ殻取りを行っている男性だそうだ。下の図は、左から荷物とわらじを肩にかついだ棒にひっかけて運んでいる使用人、お仕着せの服を着た船乗り、中央の女性については、帯の結び目が後ろだと未婚、前だと既婚だと分かる、とある。その右は裕福な家の子どもを肩に乗せた男性。子どもの着ている長い装飾豊かな上っ張りは目を引く、とある。その隣は貧しい日雇い労働者、最後の男性には一般的な町人の冬の装い、などといった解説が付されている。必ずしも正しい解説とは言えないようだが、当時の日本がドイツの子どもにどのように紹介されていたかが見て取れる、非常に興味深い資料といえよう。

（ひやま　みほ　国際子ども図書館資料情報課）

2 *Rafflesia arnoldii* 世界最大の花を開くラフレシア科の寄生植物。1818年にスマトラを探検したイギリス人の植民地総督官ラッフルズT.S.Rafflesと博物学者アーノルドJ.Arnoldによって雄花が発見された。学名はラッフルズとアーノルドにちなむ。

参考文献

- 国際子ども図書館ホームページ＞本・資料を探す＞コレクション紹介＞Bilderbuch für Kinder（『子どものための絵本』）http://www.kodomo.go.jp/search/collection/other06.html
- 2006年2月4日　国際子ども図書館講演会「ドイツの子どもの本の歴史」講演テキストhttp://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_998548_po_20060204.pdf?contentNo=1
- 荒俣宏 編著『怪物誌』リブロポート 1991 ＜請求記号　KC521-E157＞

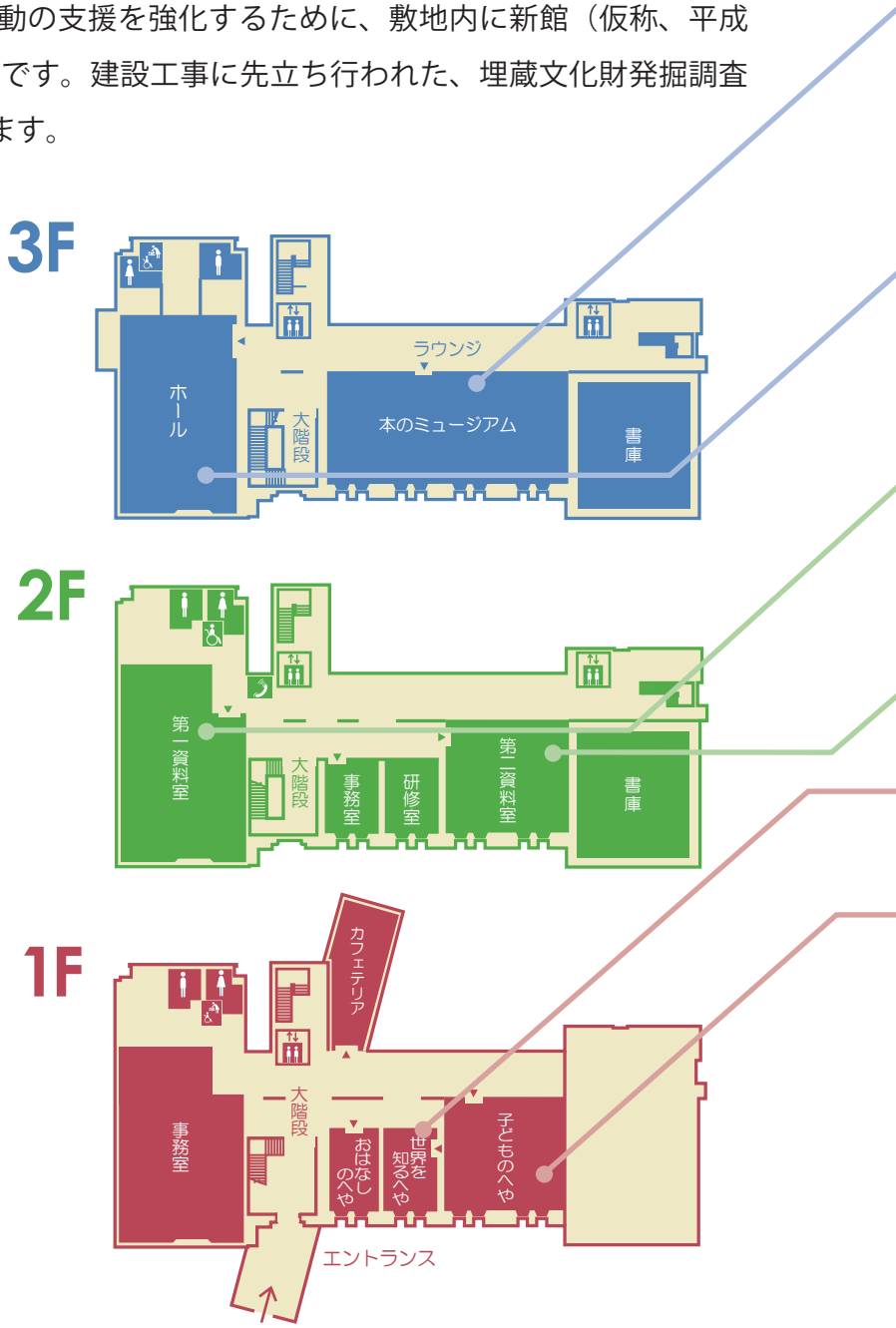
特集

子どもと本をつなぐ

―国際子ども図書館の取り組み―

国際子ども図書館は、国内外の児童書に関する図書館サービスを行う児童書専門図書館として、平成12（2000）年1月に国立国会図書館の支部図書館として設立されました。今回、特集として国際子ども図書館の基本的役割（「児童書専門図書館としての役割」「子どもと本のふれあいの場としての役割」「子どもの本のミュージアムとしての役割」）に基づく活動の一端を、建物内のご案内とともにご紹介します。

また、児童書に係る資料・情報センターとしての機能の一層の高度化を図り、子どもの読書に関わる多様な活動の支援を強化するために、敷地内に新館（仮称、平成27年度竣工予定）を建設中です。建設工事に先立ち行われた、埋蔵文化財発掘調査の様子も合わせてご紹介します。



子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く！

特集目次

本のミュージアム

那須正幹さんに聞く 06
—ズッコケ三人組からのメッセージ—

ホール

IFLA児童・ヤングアダルト図書館分科会 16
「絵本で世界を知ろうプロジェクト」と
国際子ども図書館展示会「絵本で知る世界の国々」

第一資料室

本屋にない本 31
『読書推進運動協議会の50年　1959-2009』
『生誕百年 新美南吉』

第二資料室

今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から 02
子どものための百科図譜　19世紀ドイツの森羅万象

世界を知るへや

子どものへや

国際子ども図書館・夏のイベントの事例紹介 20
夏休み読書キャンペーン

書庫

館内スコープ 30
中高生に国際子ども図書館の案内をしています

新館（仮称）

発掘！埋蔵文化財調査から見えた歴史 22
—国際子ども図書館の新たな幕開けへ向けて—

那須正幹さんに聞く
―ズッコケ三人組からのメッセージ―

宮川　健郎

2013年10月5日、雨の土曜日、国際子ども図書館に、児童文学作家の那須正幹さんをおむかえした。那須さんは、朝、山口県防府市のご自宅をたってこられたとのこと。山口宇部空港も、やはり小雨だったそうだ。

国際子ども図書館3階のミュージアムで開催中の「日本の子どもの文学―国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み―」の「児童文学者コーナー」の6回めのテーマは「那須正幹」で、那須さんのこれまでの仕事をふりかえる展示をした。それにともなって、那須さんご本人にお出ましいただき、講演会を催した。第Ⅰ部は「ズッコケ三人組からのメッセージ」という演題の那須さんの講演、第Ⅱ部は「21世紀の子どもたちに手渡したいもの」と題して、那須さんと、「日本の子どもの文学」展の監修者である私が対談をした。

まず、那須さんの講演の一部を紹介しよう。那須さんが1978年から2004年まで書きつぎ、50巻で完結した『ズッコケ三人組』シリーズ（ポプラ社）のことを中心に話がすすんだ。文庫版をふくむと、累計で2千万部以上を売り、現在も読まれているシリーズである。

那須さんの講演から：『ズッコケ』の書き方

僕としてはあの作品は、いろんな株式会社を作らしたり、無人島に漂流したり、殺人事件を解決したり、まあ、いろんなこと、オンブズマンにもなりましたしね。それから、法定伝染病、デング熱という、今またデング熱が流行しているそうですが、そういう今まで日本になかったような病気などを書いてみたり、まあいろんなこと書いているんですけれども、結局あれはね、僕からいえばごっこ遊びなのですね。だから探偵ごっこ、漂流ごっこ、オンブズマンごっこ、みんなごっこ遊び、子どもの立場でそういう社会的なものを取り込んで、それをごっこ遊びにしてしまう。だからあの話というのは、最後には必ず3人は、花山町へ生還するわけですね。山賊に拉致されたりもするのだけれども、最後にはちゃんと帰ってくる。あれがね、ハチベエがどっかで不慮の死を遂げたり、モーちゃんが伝染病にかかって死んだりというようなことには絶対にならないのです。読者もそれはお約束事として、先刻ご承知で読んでいるわけです。お約束事としてね。だからかえってそういう書き方が、楽しいわけですね。

それから、三人組が年を取らさんかったりということね。あれはやっぱり今まで無かったのですよ。日本の児童文学は成長の文学ですから、必ず何かの事件が起こって、主人公はそれによって優しさを知ったとか、しっかりした子どもに成長したとかいう、「使用前使用後」があるんです。ところが、ハチベエ、ハカセ、モーちゃんというのは、どんな事件が起こっても、そういうのがないんです。どんなことやっても、あいもかわらずハチベエはおっちょこちょいだし、モーちゃんはのんびり屋さんだし、ハカセは理屈屋、そういう最初の設定から、一切、精神的にも、もちろん肉体的にもずっと6年生のままですからね、肉体的にも成長しない。

『それいけズッコケ三人組』
那須正幹 作　前川かずお 絵　ポプラ社　1978

そういうシリーズというのは漫画では多いのですけれど、ちびまるこちゃんはずっと小学校3年です。サザエさんも、あれは最初ちょっとね、タラちゃんが生まれるまでは成長していますけれども、その後はずっと同じです。だから漫画では多いのだけれども、だけど、児童文学の世界で、ああいう成長しない話を50巻も書いたのは僕が初めてです。ま、それも僕はファンがついてくれた理由じゃないかなと思っとります。

そういうことで、書き始めたのですけれども、残念ながら50巻でやめました。というのは、僕

があの話を書き始めた頃には、まだ子どもの世界と『ズッコケ』の世界が地続きだったのです。それがだんだんだんだんやっぱり子どもの世界が変化してきて、「三人組は、私たちのできないことをやってくれるから楽しい」とかね、そういう手紙がきて、で、人気もね、最初はハチベエが断トツだったのが、最後にはモーちゃんが一番人気がありました。ほっとするといいます。今の子どもは、やはりハチベエみたいな活発な子は嫌なようで、モーちゃんみたいに癒し系の方が安心できる。何かその辺のところも子どものこう、環境が変化しているし、こちらも書き始めたときは34歳が、もう60過ぎになったから、小学校6年生という年齢に対するイメージもだんだん変わってきたから、50巻でやめたのです。

那須さんの講演から：『ズッコケ』の中でできなかったこと

ただね、『ズッコケ』の中で一つやっていないことがあるんですよ。それが何かというと、三人組というのは、よくタイムスリップして、江戸時代で平賀源内さんに会ったり、戦国時代にいったり何かしているのですけれども、唯一やっていないのは、戦争中の、太平洋戦争中の時代にはタイムスリップさせてないのです。僕は一方では戦争とか原爆についていろいろ書いているのだけれども、『ズッコケ』シリーズの中では、そういうことをちらっと書いたところもありますが、本格的に書いてはいないのです。なんでかなと思って、最初のうちは無意識だったのだけれども、考えてみると、要するにハチベエみたいなあんなね、やんちゃな子どもが、戦争中に小学校、当時のだったら国民学校の6年生だったら、恐らく先生にいつもどやしつけられているだろうし、モーちゃんみたいにとろくさい奴は、軍事教練で配属将校から蹴飛ばされるだろうし、ハカセみたいな理屈屋はね、この戦争は間違っているんじゃないですかというようなことを言って特高ににらまれる。つまりあの三人組があれだけ元気に駆け回れるのは、日本がやっぱりまだまだ平和で民主主義の国だからこそ、彼らはあれだけ元気に駆け回れるんだということに思い至って、もう最後は意識的にそういうことは避けてあの物語、あの作品には書きませんでした。

講演会後半は、私が聞き手になって那須さんのお話を聞く対談の時間になった。私は、『ズッコケ三人組の大研究』という子ども読者にも読んでもらえる研究書を3冊刊行したことがある。対談は、この『ズッコケ三人組の大研究』（石井直人と共編、ポプラ社、1990年、2000年、2005年）のことからはじまった。

対談から：那須文学の二つの系列

宮川：『ズッコケ三人組の大研究』という本を出し始めたのは、子どもの本に熱心な大人たちの間で、例えば『屋根裏の遠い旅』(偕成社　1975)とか『ぼくらは海へ』（偕成社　1980）という、シリアスと言われますけれども、おもに偕成社で出してきたような作品は大変評価が高かった。ところが、『ズッコケ』の方はあまり関心を持たれないというか、もしかすると批判的に扱われているということに何か違和感を覚えまして、『ズッコケ』の方を考え直すことから那須さんの世界を見直すということができないかと思って、ポプラ社に刊行をお願いしたんですね。

那須さんの中では、『ズッコケ』シリーズと、例えば今申し上げた『ぼくらは海へ』とか『屋根裏の遠い旅』とか、そういう別のジャンルだと思われているような二つと言うのは、書き分けがあるのでしょうか。それともどこかでつながっているのでしょうか。

那須：うーん。まあ、いずれもわが子ですからね。『ズッコケ』がかわいくて『ぼくらは海へ』が憎い、というようなことはないです。どっちも自分の作品ですから愛着はあるけども、やっぱり『ズッコケ』を書いとると、もっとシリアスなものを書いてみたい、とかね。でまた、シリアスなものを書きよったら、もういっぺんゲラゲラ笑えるようなものを書いてみよう、とか。僕は割と移り気というか、書いた作品はすぐ忘れてしまうんですね。それで、書いてる時に、次は何を書こうとか考えたりしてますからね。僕の中では割と整合性というのか、『ぼくらは海へ』も『ズッコケ』も別に変わりはないんだけどね。まあ、やっぱり世界も違うから文体も違うし、登場人物も描き方がちょっと変わってるからね。ただ、僕としては、どちらも同じ我が子という感じやけどね。

宮川：移り気とおっしゃいましたが、ある種のバランス感覚というか、そういうふうにも見えるんですけれども。

那須：まあ、あんまり『ズッコケ』みたいなものばっかり書きよったら飽きるしね。

『ぼくらは海へ』
那須正幹 作　安徳瑛 絵　偕成社　1980

国際子ども図書館展示会「日本の子どもの文学」児童文学者コーナー（第６回）那須正幹　（展示期間終了）

宮川：そうなんですか。『ぼくらは海へ』というタイトルが話に出ましたけれども、今、那須さんの児童文学者コーナーが本のミュージアムにありますが、日本の児童文学の流れを見ていただいている本展示はもう2011年からやっていて、その中で、現代児童文学のあり方を変えた作品として『ぼくらは海へ』を展示させていただいているんです。

今、振り返って思うと、『ぼくらは海へ』というのは、それまでの60～70年代の作品が子どもをめぐる問題を書いたときに、その問題は子どもによって必ず乗り越えられるというような、理想主義という形だったものを、本当に子どもが乗り越えられるかどうか分からない、というところに立ってしまった。その点で新しかったと思うんですけども、ご自身としては、その辺りについてお考えがあったのでしょうか。

那須：うーん、どうかな。書きよったらそうなった、いうことかな。やっぱり物語の流れとして、無事に生還するところまでは僕の中には無かったから。僕の作品では珍しく、結末の場面が最初にあって、そこに向けて話を進めていくようなところがあったからねえ。ただあの作品だって、あなたが褒めてくれるまでは全然無視やったよ。

宮川：この間、文春文庫（2010）にもなりましたよね。

那須：そうそう、子どものときに読んだ人が編集

者になって、ぜひやらせてくれって編集長に頼んで、やらせてもらったって言いよったねえ。

宮川：今、最後の場面が最初からあった、というお話を初めて聞きましたけど、そこに『ぼくらは海へ』というタイトルがくっついてくるわけだと思うんですが、何人かの少年主人公がいて、自分たちの問題をそれぞれ抱えていて、その問題をずっと突き詰めていった挙句に、やっぱりもうここにいるよりは海へ出て行った方がましだ、という所へ踏み込んでしまう話だと思うんです。ですから、最後はもう海へ出て行って帰って来なかった、という暗示で終わる作品で、そこが問題作というふうにも言われてきました。

実は、もう一つのことを考えていて、あの作品が1980年の1月に偕成社から出ていますけど、同じ年の暮れにズッコケシリーズ4作目の『あやうしズッコケ探険隊』が出ています。『ぼくらは海へ』の方は、海へ出て行って帰って来ない結末ですけども、『あやうしズッコケ探険隊』の方は、三人組がボートで海へ出て漂流してしまって、無人島に乗り上げて、最後の最後は夏休みのおしまいに無事に花山町に帰ってくる。さっきおっしゃったように文体が違うんだけども、海へ出て行った子どもたちを、『ズッコケ』の装置を通してもう一回家に帰してあげた、というような仕組みが1980年の那須さんの中に起こったのではないか。それがバランスということかもしれないと、これは前から言っているんだけれども、那須さんは「いや、そうかね？」と言って、肯定してくださったことはないんです。どうですか、やっぱり違いますか？

那須：そらあ、やっぱり『ぼくらは海へ』を書いたからね。そうすると、その後の少年たちの、今度はロビンソンクルーソーみたいな冒険を頭の中で想像するのは楽しいから、それで書いたのかも分からんね。ただ、僕としては意識的にあの続きを書いてやろうという気はなかったけどね。

宮川：まあ、作家の気が付かないところを言うのが批評や研究ですから、いいんです。『ぼくらは海へ』は1980年1月、『あやうしズッコケ探険隊』は同じ年の12月で、まさに踵を接しているではないか。僕の中では、『ズッコケ』と『ズッコケ』ではない作品群は、やはり今言ったようなところで接続をしていて、いろんな形で入り組んでいるのではないかと思っています。

『ズッコケ三人組』シリーズ完結後、那須さんは、『ズッコケ中年三人組』シリーズ（ポプラ社2005～）を1年に1冊ずつ書きついでいる。

対談から：『ズッコケ中年三人組』の世界

那須：今回はモーちゃんの娘が中学校のときにいじめに遭うて、それから高校に行って、今回の『ズッコケ中年三人組Age48』(※講演会当時未刊行) では大学一年生になってるという、そういう子どもたちの成長も一緒に、そして前に起こったこともそのまま継続している形ですから。ハチベエは前のときに市会議員になったから今回は市会議員は全然関係なしってわけにもいかない、そういう時間の流れをちゃんとチェックしながら……時々忘れてハチベエの子どもがいつの間にか、本当はまだ大学二年生なのに三年生になっていて、編集者からこれちょっとおかしいじゃないですかって言われることもありますけどね。

宮川：確かに市長選挙の巻（『ズッコケ中年三人組Age47』）で、さっきおっしゃったけどハカセと荒井陽子のところに初めての高齢出産の赤ちゃんが無事誕生する。で、どうして荒井陽子が40代になるまで結婚しなかったのか、というようなこともちょっとたどるところがあって、そういうご苦労も今伺っていてあるんだなと思ったんですけれども、『中年三人組』のシリーズになって一番大きいのは、やっぱり宅和先生が亡くなったということですね。88歳になって、米寿で年に不足はないんでしょうけど、とうとう亡くなったという事件、あれをお書きになったのはどんなふうなことで。

『ズッコケ中年三人組』
那須正幹 著　前川かずお 原画　高橋信也 作画
ポプラ社　2005

那須：うーん、あれはやっぱり最初からね、『中年三人組』を書いておるとき、宅和さんはどこかで殺さないけんな、というのがずっとあって。年齢を考えたら、絶対どっかで殺さんといけん、で、先延ばしにしとったところもあったわけですね。でも88になったから、そろそろ死んでもらわんと……そうすると老いと死の問題が出てきて、あれは『ズッコケ中年三人組Age46』じゃったかね、そのときには老いと死をテーマにして、モーちゃんのお母さんも認知症にかかったりもするし、実は宅和先生にも恋人がおったという、これもちょっと認知症にかかったばあさまが出てきて、そういう話で渡辺淳一も真っ青の官能小説を書いて。編集さんからは、那須さん、これは子どもも読むんですからあまり生々しいのは書いてくださるなと言われて、ぼくは怒ってね、これは大人向けに書いとるんじゃから、そんなこと言うならボツにするといってけんかしたりしたこともありますけどね、まあ、社長はこれでいいと言って本になったけどね。大人ものを書くといろいろ大変です。

宮川：『ズッコケ三人組』シリーズのほうの最終

巻『ズッコケ三人組の卒業式』では宅和先生はそろそろ教職を退こうかというサブストーリーがずっとあって、子どもたちの卒業と、先生が教職を退く、すなわち先生の卒業が重なっています。最後にハチベエが、卒業式の後で一旦解散するんだけど帽子を忘れたことに気がついて教室に戻ると先生が残っていて、先生辞めちゃだめだよっていうところで終わるわけですけれども……。元のシリーズ（『ズッコケ三人組』）の最後でも宅和先生の卒業というのが半ば主題だったと思うんだけれども、『中年三人組』のシリーズになって、毎年年をとっていくと、先生も当然年をとって、人間ですから、やがて亡くなる、それをかつての子どもたちが見送ると言うことも書かれてしまうんだなあと、感銘深く読んだんですが。

もともとのシリーズが毎年6年生を繰り返していくという、ある独特の世界を書いていて、『中年三人組』になったら次々年をとっていくので、日本の現実がより直接に響く世界を作られていると思いますし、そこがまた違ってきたんだと思います。たとえば先ほど戦争のこともおっしゃいましたけど、ここ最近の現実というと2011年にミュージアムの展示会（「日本の子どもの文学―国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」）をオープンしてまもなくあの東日本大震災が起こって、それが原発事故というのを引き起こしてしまうわけです。その事件があって何年か経っているわけですが、この大震災後の状況というのは、原発の問題が明らかになったというのもあって、70年近く前の広島というのにもリンクしているような気もしているのですが。今の日本の状況から新しくモチーフを汲み取るということが、『中年三人組』でも他の作品でも結構なのですけれど、なにかございますか。

那須：ちょっと難しいんだけど、『中年三人組』は1年先を書いとるんですね。で、たとえば裁判員制度、ハチベエが裁判員になって殺人事件を扱う話を書いたことがあって、それはまだ裁判員制度が始まっていないときに―1年先ですから―裁判員制度が始まったと言うことで、裁判所に通っていろいろ調べて書いたんですけど、結局現実の制度とはちょっとずれたディテールがあって、やはり現実を書くのは難しいなと。それでやはり大震災のこともちらっと書いてみようというのがなきにしもあらずじゃけど、何せこのご時世でしょ、何が次の年に起こるか分からない、下手に書いても本当にそうなるのか分からないということがあって、なかなか現実の世界とフィットさせるのが難しいですね。本当だったら原発問題とか、消費税は確実に上がっているだろうから次の時には消費税のことは書けるかなと思うけど、なかなか漠然としか書けないね。せいぜい「リーマンショック以来ミドリ市の経済は低迷している」というぐらいには書けると思うけど、やっぱり次の年に何が起こるかは僕自身予測がつかないから、そういう世界、現実の世界を切り取って物語の世界に反映させるのは非常に難しい。まあ今の時代だから余計そうなのかも分からんけどね、それは僕もちょっと悩ましいところです。

宮川：年をとっていく仕組みの中で現実にだいぶ接近したとはいえ、やはり『ズッコケ』ワールドですから、やはり架空の世界ですよね。『ズッコケ』の文体というのは、ハチベエ、ハカセ、モーちゃんという、かなりはっきりした輪郭のキャラク

ターが、ちょっと大げさなというか、独特の語り口で語られるというものです。そこは他の作品群とはやっぱりはっきり違うと思うのですけれど、そのことによってある現実そのものではない架空の世界みたいなものがきちんと成立するということが、多分起こっているのだろうと思うのです。さっき申し上げたこととちょっと矛盾するかもしれませんけれども、現実の影響をかなり受けるようになりながら、あいかわらず『ズッコケ』の文体というのが維持されているので、もう一つの世界であるということも同時に確かだと言う、まあその現実ともう一つの世界とどうつないでいくのか、という―今おっしゃった一つ先を書いていくという具体的なご苦労が伺えましたけど―そういうことが起こっているのかな、と改めて思いました。

さて、那須さんとふたりで話してきましたが、このあたりでフロアーの方たちからご質問などがございましたら、うかがいたいと思います。

このあと、参加者からの質問がつづいた。なかには、おかあさんといっしょに参加した中学生の男の子からの質問もあった。那須さんを囲んで楽しい時間をすごす午後になった。

宮川　健郎（みやかわ　たけお）
1955年8月3日、東京生まれ。武蔵野大学教授。児童文学研究者。国際子ども図書館展示会「日本の子どもの文学」監修者。
『国語教育と現代児童文学のあいだ』、『宮沢賢治、めまいの練習帳』、『現代児童文学の語るもの』、『子どもの本のはるなつあきふゆ』、『物語もっと深読み教室』、『名作童話 宮沢賢治20選』（編著）、『名作童話を読む 未明・賢治・南吉』（編著）など、著書多数。

那須　正幹（なす　まさもと）
1942年6月6日、広島生まれ。児童文学作家。一般社団法人日本児童文学者協会前理事長。1972年に『首なし地ぞうの宝』でデビュー。その後、社会的なテーマをとりあげた『屋根裏の遠い旅』、『ねんどの神さま』、『絵で読む広島の原爆』、『折り鶴の子どもたち―原爆症とたたかった佐々木禎子と級友たち―』、『ヒロシマ』三部作、シリアスなテーマの『ぼくらは海へ』、エンターテインメントの『ズッコケ三人組』シリーズ50巻など、多様なテーマと意欲的なスタイルをもつ作品を多数著して、現代の児童文学に大きな影響を与え続けている。野間児童文芸賞、巌谷小波文芸賞、日本児童文学者協会賞ほか受賞多数。

国際子ども図書館展示会

日本の子どもの文学

国際子ども図書館で開催中の長期の展示会「日本の子どもの文学－国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」では、国際子ども図書館が所蔵する本、絵本や雑誌の中から、明治から現代に至るまでの時代をいろどった代表的な児童文学作家・画家の作品を紹介しています。

本のミュージアム（国際子ども図書館３階）

会場

本のミュージアム
（国際子ども図書館３階）

開催時間

午前９時30分～午後５時

会期中の休館日

月曜日、毎月第３水曜日（資料整理休館日）、５月５日を除く国民の祝日・休日、年末年始

21 世紀の子どもの本コーナー　その１（絵本）

現代絵本の流れを受けて、21 世紀に入ってから様々な形の絵本が出版されています。その中から「赤ちゃん絵本の広がり」「国境を越えた絵本づくり」「3.11 以降の絵本」の３つのテーマをとりあげて紹介しています。

展示期間　2014 年２月 25 日（火）～ 11 月 30 日（日）

関連講演会やギャラリートーク（展示解説）の開催を予定しています。詳細は国際子ども図書館ホームページ等でお知らせします。

URL：http://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/now.html

展示解説本

展示会「日本の子どもの文学」の展示解説本が発売されています。

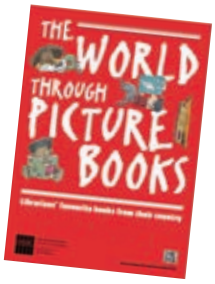
A4　80 頁
1,500 円（税込・送料別）

入手に関するお問い合わせ：
株式会社山越
〒 151-0051 渋谷区千駄ヶ谷 3-12-18
TEL　03-5413-7778（代表）

電子展示会「日本の子どもの文学」

インターネット上からも、明治以降の日本の子どもの本の歴史を概観できる代表的な作品約 220 点の展示・解説が見られます。国語教科書掲載作品、童謡作品および著名な児童文学者の紹介コーナー、関連年表も含んでいます。

URL：http://www.kodomo.go.jp/jcl/index.html



IFLA 児童・ヤングアダルト図書館分科会「絵本で世界を知ろうプロジェクト」と国際子ども図書館展示会「絵本で知る世界の国々」

IFLA プロジェクト

IFLA（International Federation of Library Associations and Institutions, 国際図書館連盟）は、1927年に創設された図書館および情報サービスに関する世界最大の組織です。IFLA内には40以上のテーマ別の分科会が設けられ、それぞれが図書館に関する課題に取り組んでいます。その1つである児童・ヤングアダルト図書館分科会（Libraries for Children and Young Adults section）では、2010年から日本の委員の提案で、「絵本で世界を知ろうプロジェクト」（The World through Picture Books）[1]に取り組んできました。このプロジェクトは、子どもたちが絵本を通じて

外国の文化・言語に親しむことができるように、世界各国の図書館員が自国の代表的な絵本を10冊ずつ選んで展示会セットを作成し、世界中で展示会を開催するというものです。

2012年のIFLAヘルシンキ大会に合わせてセットが構築され、大会の会場であるヘルシンキとヨエンスー[2]で、19か国147冊の絵本を紹介する展示会を開催しました。展示会は、大会会場近くの図書館で開催され、大会の参加者や現地の図書館の利用者など、多くの人が来場しました。

絵本は次のような基準で選ばれました。

●対象年齢は0～11歳

●その国の代表的な絵本で長く読み継がれている、あるいは読み継がれると思われるもの

●その国で出版された、その国のオリジナル作品

●その国の言語で書かれ、翻訳ではない作品

●読み聞かせ、子どもと一緒に読むのに適した作品等。

このセットは2組作られ、1組は提案国であることと、震災復興に資するために日本の国際子ども図書館に、もう1組はフランス国立図書館に寄贈されました。

最初の147冊が日本に寄贈された後、このプロジェクトに参加する国が増え、世界中から国際子ども図書館に絵本が届きました。現在では、展示会セットは30以上の国と地域の、約300冊の絵本で構成されています。

「絵本で世界を知ろうプロジェクト」参加国・地域

欧州
イギリス
クロアチア
スイス
スウェーデン
セルビア
デンマーク
ドイツ
ノルウェー
フィンランド
フランス
ルーマニア
ロシア

アフリカ
アルジェリア
カメルーン
セネガル
ナイジェリア
ベナン
マダガスカル
マリ
南アフリカ
モーリシャス
レユニオン島

中東
カタール
トルコ
レバノン

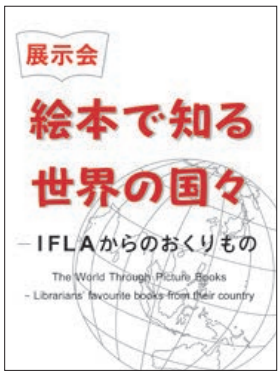
アジア
インド
韓国
シンガポール
日本

北米
アメリカ合衆国
ケベック（カナダ）

中南米
アルゼンチン
グアドループ
コロンビア
ハイチ
ブラジル

1 http://www.ifla.org/node/6718
2 IFLA大会に先立ち、8月9日·10日に児童・ヤングアダルト図書館分科会のサテライトミーティングがフィンランドのヨエンスーで開催されました。

展示会「絵本で知る世界の国々」の開催



展示会セットの寄贈を受けて、国際子ども図書館では、2013年の5月9日（木）から6月9日（日）まで、展示会「絵本で知る世界の国々―IFLAからのおくりもの」を開催しました。展示会では、IFLAから寄贈された世界各国の絵本を展示するとともに、子どもたちが国際理解を深めることができるように、各国の概要とその国の「こんにちは」を意味する言葉をパネルで紹介し、国旗も展示しました。

また、絵本の内容が分かるように、カタログ（英文）を翻訳して、作品の解説部分をキャプションとして絵本にはさんで展示しました。展示会を見た人からは、「いろんな国の絵本が見られて楽しかった。」「各国の子どもについての視線の共通しているところ、異なる表現が見られて面白かった。」等の感想が寄せられました。2014年も4月22日（火）から5月25日（日）まで同展示会を開催しました。

展示会セットの貸出し

2013年の展示会の後、展示会セットの貸出しを開始しました。国際子ども図書館に寄贈されたセットは、日本国内とアジア･オセアニア地域に、フランスに寄贈されたセットは、アジア・オセアニア以外の世界各国に貸し出すことになっています。初年度の2013年度は、韓国の2つの図書館と鎌倉市中央図書館に貸し出しました。

最初の貸出し先となったのは、韓国国立子ども青少年図書館です。2013年8月14日から9月14

展示会「絵本で知る世界の国々」の様子

日まで同図書館で展示会が開催されました。続いて、仁川市立スホン図書館で9月21日から10月13日まで展示会が開催されました。その後、セットは日本に戻り、鎌倉市中央図書館で10月24日から11月5日まで展示会が開催されました。

2014年度も国際子ども図書館での展示会が終了した後、6月から展示会セットの貸出しを行います。今年度は、岩手県立図書館、茨城県立図書館、静岡県立図書館、陸前高田子ども図書館うれし野子ども図書室分館ちいさいおうちの4館に貸し出すことになりました。今年度の募集はすでに終了していますが、国際子ども図書館は、2015年度以降も展示会セットの貸出しを行う予定です。子どもから大人まで多くの方に、絵本を通じて世界各国、各地域を知っていただくために、この展示会セットが活用されることを期待しています。

（飛田（とびた） 由美（ゆみ）　収集書誌部外国資料課長、IFLA児童･ヤングアダルト図書館分科会常任委員）

韓国国立子ども青少年図書館

韓国仁川市立スホン図書館

展示会セット「絵本で知る世界の国々―IFLA からのおくりもの」の貸出し

展示会セットの内容

○各国から選定された資料　約 300 冊
○The World Through Picture Books（カタログ）1 冊
○資料リスト
○資料のキャプション（カタログの資料解説の日本語訳）
○IFLA プロジェクトパネル　1 枚
○世界の大陸パネル　7 枚
○各国パネル　36 枚
○各国の「選書に当たって」ファイルフォルダ　1 冊
○ポスター　2 枚

※2014 年度の募集は終了しています。

上記の資料を右画像の貸出し箱、6 箱に詰めて貸し出します。詳しくは国際子ども図書館のホームページ（http://www.kodomo.go.jp/event/lend/index.html）をご覧ください。

国際子ども図書館・夏のイベントの事例紹介

夏休み読書キャンペーン

平日は、乳幼児連れの姿が目立つ国際子ども図書館内も、夏休みともなれば、連日元気な小中学生の姿で大賑わいとなります。

読書キャンペーンとは

夏休みには、全国の図書館で子ども向けの各種イベントが行われますが、国際子ども図書館では、１階の「子どものへや」・「世界を知るへや」で、読書キャンペーンを実施しています。これは、本を読んでクイズに答えてもらう子ども向けのイベントです。読みたい本が決まらない子どもにも、クイズを通して本に親しんでもらうという目的で行っています。毎年、全国から訪れた、のべ1,000人以上の子どもが参加しています。

クイズを作る

クイズは、初級編、中級編、上級編の3コースがあります。各コースとも出題数は5問で、１冊の本から1問出題します。ほとんどが選択式の問題ですが、一部に記述式もあります。出題する5冊には、日本と外国のものを取り混ぜた読み物や昔話、知識の本、夏らしい季節感のある本を入れています。また、あまり知られていないけれども、ぜひ手に取って読んでほしい本を選ぶようにしています。初級編は、未就学児も参加できるように絵本が中心です。

クイズが面白くなるかならないかは、職員の腕の見せどころです。クイズは本の後半部分から出題し、最後まで読まないと答えられないように作ります。やさしすぎず難しすぎず、子どもが途中で飽きたり、あきらめてクイズを放り出したりしないように作るのがポイントです。

クイズが完成したら、出題した本に目印をつけ、棚に並べ準備完了です。

いよいよ開催

いよいよ夏休み読書キャンペーンの開催です。まずは来室した子どもに声をかけ勧誘します。そして、クイズに興味を持ってもらえるように様々に工夫した例題を提示します。たとえば、クジラの写真を看板にして、その種類を当てる例題を出しました。あらかじめ、看板の下にクジラの本を準備しておき、その本を見れば答えが分かるという仕組みにしておきます。

写真１

さて、参加を決め、問題用紙をもらった子どもは、その裏面にあるへやの地図（写真１）を頼りに、クイ

ズの対象となる本を見つけなくてはなりません。どの子も真剣な表情で本を探し回ります。自分で見つけ出した本を読むことには、ただ渡された本を読む以上の楽しみがあるようです。

クイズに正解すると、職員が手作りのスタンプを押します（写真2）。不正解の場合は、もう一度、読んでみるように促したり、一緒に読みながらヒントを出すなどしたりして正解に導きます。全問正解した子どもは、手作りのしおりがもらえます（写真3）。しおりがもらえることは秘密になっていますから、子どもは思わぬご褒美に笑顔になります。

写真2

写真3

読書キャンペーンでのエピソード

夏休みに入って間もないある朝のこと、小学校中学年くらいの男の子が一人でやってきて、黙々とクイズを解いて帰っていきました。問題がやさしすぎたのか、それとも面白くなかったのかと気になっていたところ、後日、友達3人と再び来室し、こんどは友達にクイズを勧めていました。本人は答えを知っているだけあって、得意げにしている様子を目にした時には、担当者冥利につきました。

またある日の閉館間際には、「今日は、子どもがクイズに挑戦して、普段手に取らないような本が読めました。」と、カウンターまで声をかけに来てくれた親御さんもいました。

今年のキャンペーンは

さて、今年も夏休みに向けて、読書キャンペーンにどんなクイズを出そうか、候補となる本を持ち寄りアイディアを出し合います。クイズのネタは、選書をはじめとする日常業務の中にありますから、いつも頭のどこかで気にかけています。「ミイラや図工の問題も出してください。」という子どもからのリクエストもあったので、今年は、少し変わったところからも出題するかもしれません。

読書キャンペーンをきっかけに、本は楽しい、本を読んで新しい発見ができたと思ってくれる子どもが増えてくれたらうれしい限りです。

読書キャンペーンなどのイベントを通し、子どもの反応を知ることは、子どもと本をつなぐ役割を果たす上で私たち職員の経験の蓄積として役立つものと考えています。

（国際子ども図書館児童サービス課）

発掘！埋蔵文化財調査から見えた歴史
―国際子ども図書館の新たな幕開けへ向けて―

1　はじめに

国立国会図書館国際子ども図書館では、平成27年度の新装開館を目指し、新館（仮称）を建設工事中です[1]。新館（仮称）は延床面積約6,200㎡・地上3階地下2階の扇形をした建物になる予定です。

建設地は国際子ども図書館の裏手にあり、数々の変遷をたどった後、更地となっていた場所です。建設工事に先立ち、平成23年8月から平成25年3月までの期間、国土交通省関東地方整備局から委託を受けた東京都埋蔵文化財センターによる埋蔵文化財発掘調査が行われました。

筆者は、発掘調査が行われた当時、国際子ども図書館企画協力課に在籍し、国立国会図書館総務部管理課とともに本調査に協力する機会を得ました。

本稿では当時を振り返り、発掘調査の様子や背景、そして発掘調査から見えてきた当地の歴史についてご紹介することにします。

2　発掘調査の背景

国際子ども図書館が立地する上野公園一帯は、「上野忍岡遺跡群」と呼ばれる遺跡にあたります。このような地域で新たな土木・建築工事等を行う場合には、文化財保護法により事前に埋蔵文化財

発掘調査を実施する必要があります。

現在の国際子ども図書館は、もともと国立国会図書館支部上野図書館として使われていた建物を2度にわたり改修して開館したものです。その改修工事にともない、平成10年、平成13年に埋蔵文化財発掘調査が行われました。それらの調査で検出された数々の遺構や出土遺物に関する成果は、すでに報告書にまとめられ刊行されています[2]。

今回で通算3回目にあたる調査も、前回のように多くの遺構・遺物の発見が期待されましたが、実際にそのとおりの結果となりました。

調査を担当したのは、過去に多摩ニュータウン遺跡群や旧新橋駅の発掘調査などの実績がある、福田敏一氏[3]（東京都埋蔵文化財センター調査研究員）です。福田氏の監督のもと、調査期間中は事故や遅延もなく多くの貴重な遺構・遺物を発掘し、整理、分析することができました。

また、今回の調査が円滑に進行できた背景には、当館総務部管理課の働きもありました。管理課は、東京都埋蔵文化財センターと国際子ども図書館、そして近隣機関の間に立ち、発掘作業と図書館運営の調整を行いました。たとえば、館内でのおはなし会やイベント開催日には音の出る重機を使用しないよう調整するなど、発掘作業と図書館運営の両立をはかるよう努めました。

3　発掘調査の開始

調査準備として、調査地が鉄板の塀でとり囲まれ、傍らにプレハブ製の現場事務所が建てられました。そして、平成23年8月から本格的な発掘作業が開始されました。

真夏の炎天下、連日多くの作業員が注意深く手作業で掘り進めます。やがて時代ごとの地層に応じて人工的な形状が表れ、過去がよみがえってきました。

写真1　発掘現場の様子

直線と角で構成された多くの竪穴からなる独特の光景は、調査が終わるまでの短い期間だけしか直接見ることができないものです（p.23 写真１）。

この機会を利用し、遺跡見学会が実施されました。大学のゼミや台東区主催の文化財講座の一行などが来訪し、いずれの見学会も好評を得ました。また、福田氏の解説による国際子ども図書館職員のための見学会も催され、私たちはこの土地に眠る歴史をあらためて認識することになりました（写真2）。

写真２ 遺跡見学会の様子

4 土の中からよみがえる歴史

今回の調査は『上野忍岡遺跡群　国際子ども図書館地点』[4]にまとめられました。

この報告書に基づきながら、今回の発掘調査で確認された代表的な遺構・遺物について、古い時代から順に紹介します。

（1）中世

茶色の釉薬が施された天目茶碗が出土しました。茶碗のふちの一部がわずかに欠けているだけで、ほぼ完全な状態で発見されました。これは15世紀後半頃のものと推定される中世の遺物です[5]（写真3）。

上野の山一帯の遺跡である上野忍岡遺跡群のなかでも中世の遺構・遺物の検出はまれです。その中世の遺物が国際子ども図書館の地で発掘され、人間が生活した痕跡として確認されたことは、学術上貴重であると同時にとても感慨深いものです。

写真３　中世の天目茶碗
（東京都埋蔵文化財センター調査報告 第279集より転載）

（2）近世

江戸時代、現在の上野公園一帯は寛永寺とその関連寺院で占められていました。国際子ども図書館の

敷地も寛永寺の子院である明王院があった場所とされます[6]。

これに関連したものとみられる多くの遺構・遺物が発掘されました。地下室（ちかむろ）と呼ばれる地下施設やその階段、皿や壺などの陶磁器、銭貨などが見つかりました。

近世の出土遺物から、数奇な運命をたどった一つの巨石のことを紹介したいと思います。

縦118cm、横68cm、高さ76cmの大きさで「加藤遠江守泰常」の刻印があるこの石碑は、愛媛の大洲（おおず）藩三代目藩主、加藤泰恒（やすつね）に由来します（写真4）。前述の前回発掘調査の時にもこの巨大な石碑の存在は確認されていましたが、今回は本格的に発掘および調査がなされました。

江戸時代、明王院は鹿児島の島津家などの宿坊として利用されていましたが、大洲藩とは関係のない寺でした。なぜ、この寺の跡地に大洲藩加藤家の巨石があったかは謎です。

これについて、福田氏は大変興味深い考察をしています。実は、明王院の隣には等覚院という大洲藩加藤家と関係の深い寺があり、この巨石は等覚院の物だったのではないかというのです。等覚院の先には護国院という寺があるのですが、明治6（1873）年、窮民のための収容施設である養育院が浅草からこの護国院に移転してきます。のちに養育院が入居者の増加により手狭となり、隣にある等覚院の敷地を囲い込むなどの整備をした際、巨石は等覚院から隣接する明王院に移設され、現在の地点に残されたのではないかと考察するのです[7]。

今回、この巨石について東京都埋蔵文化財センターと愛媛県大洲市で協議した結果、大洲市が引き取ることになりました。この地の歴史を抱えて

写真4　発掘された石碑

土の中に眠っていた巨石は、発掘調査をきっかけとして現代によみがえり、故郷へと里帰りすることになったのです。

大洲市教育委員会では、江戸における大洲藩主の足跡として将来的に市民に公開する計画なども検討されているようです。

（3）近代

そのほとんどが寛永寺とその関連寺院で占められていた上野の山は、慶応4（1868）年の上野戦

写真5　帝国図書館時代の排水枡
（東京都埋蔵文化財センター調査報告 第279集より転載）

争の舞台となり焼け野原となってしまいました。その後は明治新政府の官有地となり公園として整備されることになりました。現在国際子ども図書館が建つ場所は、当初は東京音楽学校（現：東京藝術大学）の敷地でしたが、その後分割され、帝国図書館の建設予定地となりました。

今回の発掘調査でも、明治39（1906）年に竣工した帝国図書館にまつわる遺構・遺物が確認されています。赤煉瓦の構造物が次々と土の中から姿を現しました。これらは排水枡などの設備だったと思われます（p.25 写真5）。また、水道設備に関連する「明治三三 CLEGLE LIEGE 15482」と刻印のあるベルギー製の輸入鉄管が出土しました[8]。これも当時の時代背景を物語る出土遺物です。

5　国際子ども図書館の前史

報告書では、国際子ども図書館敷地内における建物の変遷についても記述があり、興味深いものとなっています[9]。

当地では、明治39（1906）年から帝国図書館としての歴史が始まりました。その後、昭和23（1948）年の国立国会図書館の発足にともない、帝国図書館は国立国会図書館支部上野図書館となりました。

明治39年以降さまざまな図書館に関連する建物が新築または増築され、取り壊されていった歴史を垣間見ることができます。昭和25年の平面図を見ると、敷地内に仮書庫や印刷所、下足置き場という今では聞きなれない施設も建っていたようです。

今回の調査地点には、当初仮書庫が建てられていましたが、昭和42年に職員用宿舎が建てられました。その宿舎も平成18年に取り壊され更地となり、見学などで来訪する方々を乗せた大型バスのための駐車場として活用されていました。

その変遷は、現在の国際子ども図書館に至る前史そのものといえそうです。

6　歴史は新たなステージへ

発掘調査は、平成23年度実施分の1次と平成24年度実施分の2次に分けて行われました。平成24年度末までに出土遺物の整理や報告書作成が行われ、現地調査は終了しました。

その後、調査地は新館（仮称）建設の本格的な工事に入りました。調査対象となった堆積土は敷地外へ搬出され、そこは地下書庫のための空間に変わりました。国際子ども図書館3階のラウンジからは、少しずつ完成へと近づいていく建設工事の様子を見ることができます[10]（写真6）。

写真6　増築棟建設工事の様子（2013年9月26日撮影）

新館（仮称）イメージ図

今回の埋蔵文化財発掘調査は、日頃は顧みられることの少ない当地の歴史をあらためて認識させてくれる良い機会となりました。

平成27年度には新館（仮称）が完成し、国際子ども図書館は新たな幕開けを迎えます。それは古くは中世以降その時代ごとに、この地で生きた先人たちの歴史の延長線上に位置するのです。

なお、報告書に掲載された図面の一部については、国際子ども図書館ホームページでも見ることができます[11]。

（電子情報部システム基盤課　安田（やすだ）　隆昭（たかあき））

1　国際子ども図書館 第２次基本計画（ILCL2015 マスタープラン）
http://www.kodomo.go.jp/about/law/basicplan2.html

2　『上野忍岡遺跡群国立国会図書館支部上野図書館地点』（台東区埋蔵文化財発掘調査報告書　第５集）　台東区文化財調査会 編・刊　1999年　＜請求記号　GB121-G3226＞
『上野忍岡遺跡群国立国会図書館支部上野図書館地点２』（台東区埋蔵文化財発掘調査報告書　第15集）　台東区文化財調査会 編・刊　2001年　＜請求記号　YU7-H2299＞

3　著書に『新橋駅の考古学』＜請求記号　DK53-H116＞、『新橋駅発掘　考古学からみた近代』＜請求記号　DK53-H154＞、『方法としての考古学　近代における認識』＜請求記号　GB111-H90＞などがある。

4　『上野忍岡遺跡群　国際子ども図書館地点』（東京都埋蔵文化財センター調査報告　第279集）　東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 編・刊　2013年　＜請求記号　GB121-L363＞

5　前掲注４　pp.397-398

6　前掲注４　p.10

7　前掲注４　p.281

8　この鉄管は平成24年１月19日から２月14日までの期間、「本館建築（第１期完成）50周年展示 国立国会図書館建築の歩み」においてパネル展示で紹介された。詳細については、『国立国会図書館月報』613（2012.4）号　p.16参照。

9　前掲注４　pp.412-417

10　新館建築工事の進捗状況
http://www.kodomo.go.jp/about/future/construction/index.html

11　電子展示会「旧帝国図書館建築100周年記念展示会」
http://www.kodomo.go.jp/100th/index.html

国立国会図書館の平成 26 年度予算

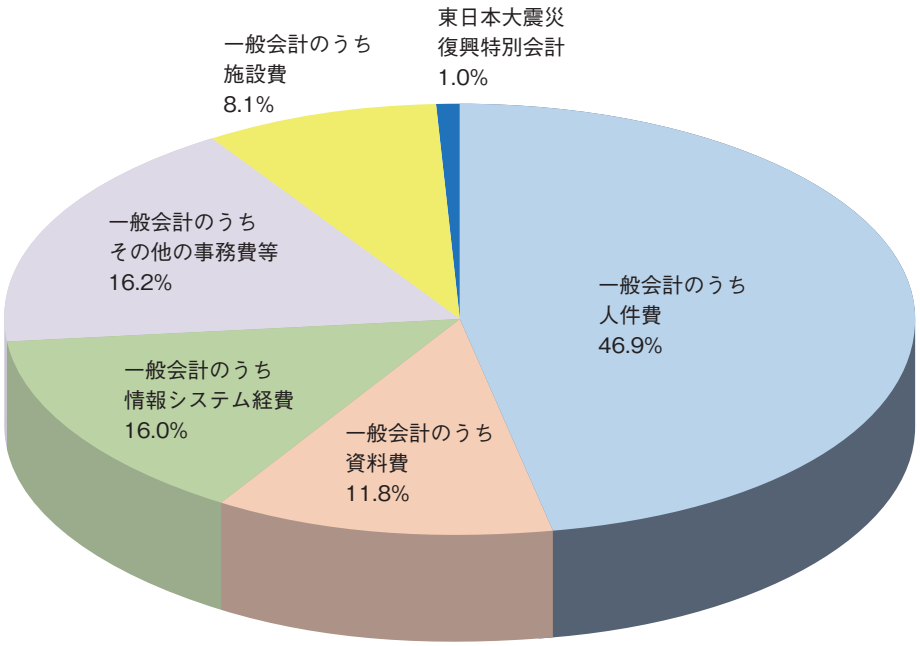
国の平成 26 年度予算が平成 26 年 3 月 20 日に成立しました。当館の平成 26 年度歳出予算は、一般会計予算と東日本大震災復興特別会計予算から構成されており、総額は 197 億 89 万円です。このうち一般会計の歳出予算額は 195 億 973 万 6,000 円です。前年度の当初予算額と比較すると、東日本大震災の復興財源確保のための特例措置の終了に伴う職員人件費の増額等により、約 7 億 2,000 万円の増額となりました。また、東日本大震災復興特別会計の歳出予算額は 1 億 9,115 万 4,000 円です。おもな内容は次のとおりです。

1 国会会議録フルテキスト・データベースシステム等の更新

国会情報を国会議員の立法活動に役立てるとともに、広く国民に提供することを目的として、次のデータベースを通じて提供しています（http://www.ndl.go.jp/jp/data/diet.html）。

・国会会議録フルテキスト・データベースシステム（第 1 回国会（昭和 22 年 5 月）からの国会会議録が検索可能）

・法令索引データベース（明治 19 年公文式施行以降の法令の制定・改廃経過等が検索可能）



予算の費目別構成比（平成 26 年度）

・帝国議会会議録検索システム（帝国議会全会期（明治 23 年 11 月～昭和 22 年 3 月）の速記録が画像等で閲覧可能）

これらのデータベースで使用している機器の更新と、検索機能の強化等の改修等を行うための経費約 2 億 200 万円が一般会計に計上されました。

国会会議録検索システム（http://kokkai.ndl.go.jp/）

2 サービス基盤ネットワークシステムの更新

当館のサービス・業務の基盤となるネットワークシステムの機器の更新と、セキュリティ強化等の改善等を行うための経費約 8 億 4,400 万円が一般会計に計上されました。

3 施設整備

(1) 国際子ども図書館の拡充整備

児童書のナショナルセンターとしての機能向上を図るための国際子ども図書館の新館建築について、5 か年計画の 4 年目の工事費として、約 11 億 7,500 万円が一般会計に計上されました。

(2) 関西館第 2 期施設整備設計

東京本館および関西館の書庫が平成 31 年度末に満架を迎える見込みとなっていることへの対応として、関西館に書庫施設の建設を予定しています（第 2 期施設整備）。平成 26 年度予算では、設計の 3 か年計画の 2 年目として、約 7,100 万円が一般会計に計上されました。

（総務部会計課）

（単位：千円）

一般会計及び特別会計総額	19,700,890

一般会計

(項) 国立国会図書館	17,918,913
人件費	9,229,336
国立国会図書館共通経費	164,784
国会サービス経費	423,288
資料費	2,329,875
うち納入出版物代償金	390,249
情報システム経費	3,161,040
東京本館業務経費	1,491,234
国際子ども図書館業務経費	245,873
関西館業務経費	873,483
(項) 国立国会図書館施設費	1,590,823
関西館第 2 期施設整備設計	71,074
国際子ども図書館新館建築工事費	1,175,119
東京本館庁舎整備費	220,847
関西館庁舎整備費	123,783
計	19,509,736

東日本大震災復興特別会計

(項) 国立国会図書館	191,154
情報システム経費	191,154
計	191,154

中高生に国際子ども図書館の案内をしています

美術館や博物館が集まる上野公園には、修学旅行生を始めとして多くの中高生が訪れます。グループ行動の時間に、上野公園の端にある国際子ども図書館まで足を運んでくれる中高生も増えてきました。国際子ども図書館児童サービス課では、こうした中高生の団体見学の案内をしています。

「よろしくお願いします！」と開始の挨拶をするときは、見知らぬ大人を前に緊張いっぱいの顔つきです。「今日は他にどこへ見学に行くの？」と尋ねたり、「この図書館が紹介された雑誌だよ」と有名なアイドルが出ている記事を見せたりして緊張をほぐします。

見学で一番の人気スポットはやはり書庫。資料が並ぶ書架を眺めたり、資料を保護するためそれぞれのサイズに合わせて作られた保存箱に驚いたりします。「ここにずっと居たい！」と言ってくれる中学生もいました。

最近は、図書館員の仕事に興味をもつ中高生の見学や、職場体験の申込みもあります。学校の課題で生徒さんから職業インタビューを受けることも。

－この仕事をしていて一番うれしい時は？

－志望職業を決めたのはいつですか？

－やりがいは？

－この仕事に就くためにどんな勉強をしてきま

したか？

次々出される質問に、一生懸命に答えます。このようなキャリア学習目的の見学が多いため、夏休みには個人向けに「中高生のための国立国会図書館の仕事紹介」というイベントを開催しています。去年は山形県や岡山県から来てくれた生徒さんもいました。

日本全国から訪れた中高生と、本や仕事の話ができる見学案内は、自分たちの業務に新しい光をあててくれる、大変やりがいのある仕事です。見学からしばらくして、お礼のお手紙をいただくこともあります。「職員の人とエンデやケストナーなど色々な作家について話すことができて本当に楽しかった」というお手紙を頂いたときは、この仕事をしていて良かったと本当にうれしく思いました。

（児童サービス課企画推進係　アリョーヌシカ）

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、
日本国内の出版物を広く収集しています。
ここでは、主として取次店を通さない
国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

読書推進運動協議会の50年
1959-2009

読書推進運動協議会 編・刊
2012.12　439p　22cm　　<請求記号　UG3-L1>

「読書週間」を知っていますか？春には「こどもの読書週間」、秋には「読書週間」があります。読書推進運動協議会（読進協）の50年史の巻頭カラーページを飾るのは、「読書週間」の歴代ポスターです。

第1章では、読進協の50年の歩みを振り返ります。「読書週間」の源流は、関東大震災の翌年1924年に日本図書館協会が提唱した「図書館週間」に遡ります。その後、戦時体制下で出版・言論や読書活動はしだいに閉塞状態に陥り、敗戦を迎えますが、「読書週間」の運動は戦後に引き継がれ再出発します。1947年に「読書の力によって、平和な文化国家を創ろう」と心をひとつに、出版関係者と図書館界、報道機関なども加わって読書週間実行委員会を結成し、第1回「読書週間」が開催されました。やがて「読書週間」に限定した事業活動ではなく、恒常的に読書推進運動を行うことを目的として、1959年にこの読進協が設立され、各地域での活動が進められます。また同年春には、第1回「こどもの読書週間」が開催されています。そして平成に至って、2000年を「子ども読書年」とした国会における決議と、同じく2000年の国際子ども図書館開館が、1993年からの官・政・民を超えた地道な取り組みの成果として記されています。

第2章では、「読書週間」と「こどもの読書週間」を始め、数々の事業について具体的な活動を記録しています。第3章では、現在活動している41都道府県の読書推進協議会から、地域の特性を生かした活動が報告されています。第4章では、機関誌『読書推進運動』の巻頭随筆より44編が再録され、読進協の足跡を辿る事が出来ます。そして第5章は資料編として、「年表」、「全国都道府県読書推進運動協議会一覧」、「標語一覧」等が収録されています。

標題紙

『読書推進運動協議会の二十年』において、当時の理事布川角左衛門氏が「どうしたならば、（読進協の）全国網をすみやかに実現することができるか」、そして「どうしたならば、読書の普及と推進を効果的にすることができるか」と発した問いかけを、「あとがきにかえて　読進協の発足」として再掲した姿勢に、読進協の志を感じます。

本書には記載されていませんが、読進協は2013年4月に公益社団法人へ移行しました。東日本大震災を機に発足した大震災出版対策本部の「大震災出版復興基金」管理運営を行うなど、さらに多彩な運動を展開しています。

日本中に子どもがいて、本と人をつなげる人がいます。そして、出版社があり、書店があり、図書館があります。読書に関わる多くの先達の献身的な努力によって、これらが結び付けられてきました。この本にはその人々の思いがこめられています。全国の図書館をはじめ読書推進運動に関わる人びとに、活動の折に開いてほしい一冊です。

（国際子ども図書館児童サービス課　高宮（たかみや）　光江（みつえ））

※入手不能。国立国会図書館東京本館、関西館、国際子ども図書館で閲覧可能。

生誕百年 新美南吉

新美南吉記念館 編・刊
2012.3　107p　30cm　　<請求記号　KG582-J105>

小学校時代、国語の教科書で『ごんぎつね』という物語を読んだことがあるだろうか。昭和55年以降現在に至るまで、小学校の国語教科書会社全社が『ごんぎつね』を採用しているとのことである。

『ごんぎつね』の作者である新美南吉は、平成25年で生誕百年を迎えた。『生誕百年新美南吉』は、彼の生誕百年を記念して、生まれ故郷、愛知県半田市にある新美南吉記念館が刊行した図録である。

本図録は4章構成となっている。「新美南吉の生涯」という章では、彼の生い立ちから死後の顕彰に至るまで、彼の生涯を丁寧に追っている。「南吉を描いた画家たち」という章では、南吉作品に絵を寄せた画家や絵本画家のインタビューが掲載されている。「ごんぎつねの世界」という章では、代表作である『ごんぎつね』について詳しく掘り下げている。「南吉と出逢う」という章では、あまり知られていない彼の詩や短歌などを紹介している。

本図録の魅力は、まず何といっても、南吉の生涯に対するこだわりにあるだろう。知人に宛てた葉書、安城高等女学校時代の下宿の間取り、果ては彼が杉治商会に勤めていた時代（昭和12年頃）に通った成宮という町のお菓子屋さんマップ（南吉は大の甘党だったらしい）に至るまで、南吉の生涯を図や写真を豊富に使って詳しく紹介している。また彼がシャガールやマチスを好んでいたことなど、彼を取り巻く知的環境がわかる情報も多数紹介されていて大変興味深い。

本図録のもう一つの大きな魅力は、日記の文章などの、南吉の生のことばが多数紹介されていることである。本図録に掲載されている彼の文章からは、著名な児童文学作家としての姿よりは、身体の弱さにコンプレックスを感じ、就職や恋愛に悩む1人の青年の等身大の姿が浮かび上がってくる。安城高等女学校での教師時代に、南吉は「尽くしても尽くしてもわかりあえないことが世のなかにはあるのだ」(p.43) と教え子によく語っていたとのことである。また彼は日記（昭和12年10月27日）に「人間は皆エゴイストである。常にはどんな美しい仮面をかむっていようとも、ぎりぎり決着のところではエゴイストである―ということをよく知っている人間ばかりがこの世を造ったらどんなに美しい世界が出来るだろう」(p.34) とも記している。『ごんぎつね』は狐の「ごん」と「兵十」とのすれ違いの物語ともいえるが、『ごんぎつね』の物語と青年期の南吉のことばが二重写しになって響いてくる。

愛知県半田市で行われた「新美南吉生誕百年記念事業」のキャッチフレーズは「初めての南吉　再び出逢う南吉」である。新美南吉の作品や本図録などを読んで、新美南吉に「再び出逢」ってみてはどうだろうか。

（調査及び立法考査局国会レファレンス課
坪井（つぼい）　伸樹（のぶき））

※入手に関するお問い合わせ先
新美南吉記念館　電話　0569（26）4888

法規の制定

【規則第１号】国立国会図書館組織規則の一部を改正する規則

（平成26年３月13日制定）

利用者サービス部音楽映像資料課において脚本・手稿譜の調査、整理等を行うこととし、利用者サービス部人文課から音楽分野のレファレンス、書誌および目録の作成および提供ならびに選書業務を音楽映像資料課に移管した。あわせて、外国電子ブックの書誌の作成、東京本館における関西館から取り寄せた新聞類の複写、Dnaviの廃止および電子版博士論文の収集に関し、所要の規定を整備した。平成26年４月１日から施行された。

【規則第２号】国立国会図書館事務文書開示規則の一部を改正する規則

（平成26年３月13日制定）

全部不開示または一部不開示の決定に対する苦情申出に期限を設けるとともに、第三者への意見聴取に伴う開示期間を一定の期間経過後とする規定を削った。平成26年４月１日から施行された。

【規則第３号】国立国会図書館資料利用規則の一部を改正する規則

（平成26年３月13日制定）

関西館における資料を帯出するカウンターの一元化に伴い所要の規定を整備した。また、電話レファレンスの申込時間を変更した。平成26年４月１日から施行された。

【規程第１号】国立国会図書館職員定員規程の一部を改正する規程

（平成26年４月１日制定）

国立国会図書館職員の定員（館長、副館長、休職者、派遣国会職員、育児休業をしている職員、配偶者同行休業をしている職員および非常勤職員を除く。）を888人から887人とした。平成26年４月１日から施行された。

【規則第４号】国立国会図書館展示会出品資料貸出規則の一部を改正する規則

（平成26年４月１日制定）

国立国会図書館展示会出品資料貸出規則（昭和61年国立国会図書館規則第10号）で参照している法規の改正に伴い、形式的な修正を行った。平成26年４月１日から施行された。

これらの法規による改正後の国立国会図書館職員定員規程（昭和33年国立国会図書館規程第１号）、国立国会図書館組織規則（平成14年国立国会図書館規則第１号）、国立国会図書館事務文書開示規則（平成23年国立国会図書館規則第４号）、国立国会図書館資料利用規則（平成16年国立国会図書館規則第５号）および国立国会図書館展示会出品資料貸出規則は、国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞国立国会図書館について＞関係法規（http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/laws.html）に掲載している。

国際子ども図書館講演会「子どもの探究活動と図書館の可能性」

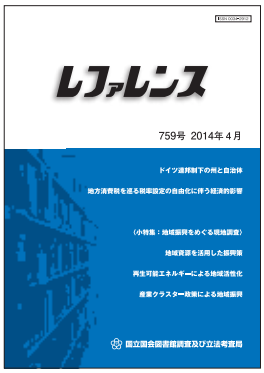
国際子ども図書館では、平成24年度から25年度にかけて、「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」を実施し、平成26年3月に、その成果を『国際子ども図書館調査研究シリーズ』第3号として刊行しました。報告書の刊行に関連し、成田喜一郎氏（東京学芸大学大学院教授）とプロジェクト主査の中村百合子氏（立教大学准教授）による対談形式の講演会を行います。

対談では、図書館情報学および教育学の観点から、“探究”とは何か、子どもの探究力を育成するために図書館に期待されることは何か等について議論します。また、当館職員がプロジェクトの成果を報告します。

○テーマ　「子どもの探究活動と図書館の可能性」
○日　時　7月6日（日）13：30～16：00
○会　場　国際子ども図書館 3階ホール
○講　師　成田 喜一郎 氏（東京学芸大学大学院教育学研究科教授）
　　中村 百合子 氏（プロジェクト主査・立教大学文学部准教授）
○対　象　公共図書館職員、学校図書館職員、図書館での学習支援に関わる方等
○定　員　60名（先着順）
○参加費　無料
○申込方法　6月3日（火）に、国際子ども図書館のホームページに掲載する予定です。
○申込み・問合せ先
　国立国会図書館 国際子ども図書館 児童サービス課 企画推進係
　電話　03（3827）2053（代表）

新刊案内

国立国会図書館の編集・刊行物



レファレンス　759号　A4　79頁　月刊　1,080円　発売　日本図書館協会

ドイツ連邦制下の州と自治体

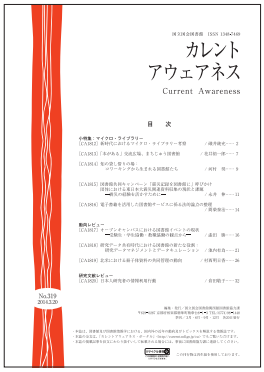
地方消費税を巡る税率設定の自由化に伴う経済的影響―クロスボーダー・ショッピングと租税競争の観点から―

＜小特集：地域振興をめぐる現地調査＞

地域資源を活用した振興策―秋田県小坂町を事例に―（現地調査報告）

再生可能エネルギーによる地域活性化―大分県を事例に―（現地調査報告）

産業クラスター政策による地域振興―広域多摩地域と沖縄を事例に―（現地調査報告）



カレントアウェアネス　319号　A4　36頁　季刊　432円　発売　日本図書館協会

＜小特集：マイクロ・ライブラリー＞

新時代におけるマイクロ・ライブラリー考察

「本がある」交流広場、まちじゅう図書館

知の貸し借りの場：コワーキングから生まれる図書館たち

図書館共同キャンペーン「震災記録を図書館に」呼びかけ団体における東日本大震災関連資料収集の現状と課題　―震災の経験を活かすために―

電子書籍を活用した図書館サービスに係る法的論点の整理

＜動向レビュー＞

オープンキャンパスにおける図書館イベントの現状　―受験生・学生協働・教職協働の観点から―

研究データ共有時代における図書館の新たな役割：研究データマネジメントとデータキュレーション

北米における冊子体資料の共同管理の動向

＜研究文献レビュー＞

日本人研究者の情報利用行動

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14　電話　03（3523）0812

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

No.638 5 May 2014

CONTENTS

02 <Book of the month - from NDL collections>
Picture encyclopedia for children:
the universe of Germany in the 19th century

04 Focus: Linking children and books:
Activities of International Library of Children's Literature (ILCL)

06 Asking Mr. Masamoto Nasu: A Message from *Zukkoke Sanningumi* (the Hilarious Trio)

16 "The World Through Picture Books project" by the Libraries for Children and Young Adults Section and the exhibition "World Through Picture Books - Librarians' favorite books from their country"

20 Introduction to an example at summer events of the ILCL: Summer reading campaign

22 Excavation! History found in the examination of buried cultural assets: For the new prologue of the ILCL

28 NDL budget for FY2014

30 <Tidbits of information on NDL>
The ILCL Guided tour for middle and high-school students

31 <Books not commercially available>
○*Dokusho suishin undō kyōgikai no 50nen (1959-2009)*
○*Seitan hyakunen Niimi Nankichi*

33 <NDL News>
○Rules & regulations

35 <Announcements>
○Lecture at the ILCL "Children's inquiry activities and potential of library"
○Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

発行所 国立国会図書館
編集責任者 小寺正一
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03（3581）2331（代表）
FAX 03（3597）5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

平成26年5月号（No.638）
平成26年5月20日発行 定価540円
（本体500円）

発売 公益社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03（3523）0812（販売）
FAX 03（3523）0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社 ブルーホップ

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文 中性再生紙使用

「鯉ノボリ」　本田庄太郎［作］
『幼年畫報』第12巻 第6号
大正6（1917）年5月　博文館　22cm
「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧になれます
（館内限定）

国立国会図書館月報

平成26年5月20日発行（毎月1回20日発行 5月号 通巻638号）

発売：公益社団法人 日本図書館協会　定価540円（本体500円）

雑誌 03919-05

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。